

仏心と葬儀

ーその22ー

苦勞・苦難あればこそ現在がある

今年3月、新たに「株式会社 釧路納棺協会」を設立したばかりの飛田が、そもそも「丸和堂」を設立した経緯は、今までにも本コーナーでもご紹介させていただきました。当時まだ太平洋炭礦のサラリーマンであった20代の新婚当時に、自らの母親と生まれたばかりの愛児を立て続けに亡くすという不運に見舞われ、悲しみのどん底にありながらも腐ることなく一念発起。むしろ自分たちと同じような境遇に置かれた人たちを慰めたいと職を捨て、手に入れたばかりのマイホームを担保に、右も左も分からぬ葬儀業界に飛び込んだのが昭和43年のことでした。

「葬儀の知識や経験はもちろん、仕事のコネや人脈など何も持たないズブの素人が、初めての葬儀を受注するまでには長い時間と苦勞が必要だった」と、現在でこそ当時の苦勞を笑って話す飛田ではありますが、それを陰日向なく支えた妻の苦勞は、いかばかりであったことでしょう。それも皆、大切な家族を亡くした人の慰めになりたいという飛田の想いに、心底から同感してのことではなければ、耐えられないことであつたと思います。

想いと技術を後代に伝えるために

現在でこそ、大ヒットした映画「おくりびと」のおかげで「納棺師」という仕

事が広く世間に認知されるようになり、大都市などでは葬儀業者から仕事を受注するフリーの納棺師というのも珍しくはないようですが、もともと故人様の末期の水をとり、湯灌をおこなったり旅支度を整えて納棺まで済ませる作業は葬儀業者がおこなうのが普通でした。飛田も数々の葬儀の現場において、苦勞を重ねながら一つずつその技術や知識を身に付けてゆき、現在でこそ数名の納棺師を育てるまでになりましたが、単に技術や知識を教えるだけでなく、「葬儀業者としての心構えから想いまでも受け継いでくれる若い技術者を育てたい」という長年の願いを形にしたのが「釧路納棺協会」だったのです。

映画「おくりびと」の影響から、最近では納棺師を志す若者が増えていくという現実もありますが、単にこの現象を一過性のブームに終わらせることなく、業界全体の技術レベルの向上と、より正しい世間からの認知を目指して「優れた知識や技術はもちろんのこと、人柄にも優れた納棺師を養成したい」。これこそが、40年以上にもわたって葬儀業者として釧路の葬儀の現場に立ち会ってきた飛田の偽らざる想いなのです。

ーつづくー

■ 次回の掲載は六月十九日(土)を予定しております。